消えた王妃と白銀の騎士

arco

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
消えた王妃と白銀の騎士

【Ｎコード】
Ｎ５４４５Ｚ

【作者名】
ａｒｃｏ

【あらすじ】
よくある異世界トリップもののその後の話です。元の世界へ帰った女子高生本人は出てこず、残された異世界の住人たちの間で話は進みます。
子供の頃から良く知る国王に呼び出された主人公の女性騎士はとんでもない頼みごとをされる。「異世界へ行く自分の代わりに王となってほしい」と。
国王の元婚約者である姉とその夫の騎士団長や侍女を巻き込んで、突然の災難に振り回されるしか能のない主人公の明日はどっちだ！

初小説・初投稿です。
生あたたかい眼でみていただけることを切に願います。

国王の乱心（前書き）

生ぬるい表現しかできませんので、タグは念のためです。
固有名詞は音楽用語ですが、音楽は一切関係ありません。出てきません。あしからず。

国王の乱心

1. 国王の乱心

幼いころからの付き合いで、気心の知れた人だと思っていた。

もちろん、相手との身分の差はよくわきまえていたし、何より忠誠を誓った主君であるのだから対等な関係ではない。だが、幼友達としてあちらからも親しくしてくれていたのでその思いは一方通行ではなかったはずだ。子供時代が終わるとソナチネの彼への気持ちは敬愛と、何より畏怖へと変わったが。

今、目の前で地面に膝をつき、肩を落とした背中を見ているとよく見知っているはずだという自負は急速に消えていき、一体どうすればいいのか見当もつかない。まさか彼と自分との間にはこんなにも深い――遠国にあるという神話の時代に神々によって作られた大地の大裂け目ほどの溝があるとは知らなかった。

ソナチネが立つのは、王室の私的な領域であるブリッランテ宮一王族が生活するための宮殿一の中でも隅の隅、野趣あふれる草花が自然のままに伸びたという風情の素朴な庭園であり、目の前の彼、ペザンテ王国の国王・アレグロが過ごすには少々寂しすぎる風景だ。同じ宮殿の庭でも南にあるグランディオーソ庭園は宮殿という言葉にふさわしく、幾何学模様に整えられた生垣と薔薇やカトレアなど美しい花々によって華やかに彩られているのだから。

国王アレグロは見た目だけを語っても完璧という言葉でしか表せない。青年神のような美しい顔立ち、目は空のような澄んだ水色、黄

金に輝く髪はゆるやかにうねり、肩口のあたりで切り整えてその麗しい顔を飾っている。背は高く、均整のとれた体にはほどよく筋肉がつき、とまあ簡単にいうと、世の乙女の理想と妄想をこれでもかと詰め込んでみました☆という容姿だ。
人柄も（これまでソナチネが知るところでは）国王として何よりも国民を労わる慈悲深い政治を心がけ、また不正を行った官吏や貴族には厳しく対処することでも知られておりそういった相手と対峙するときのアレグロはまさに鬼神のごとき迫力を発揮していた。それでいて誠意を持って仕える者にはその温厚なまなざしと言葉でねぎらうことも忘れない。だからこそソナチネはそんな彼を人としても国王としても尊敬してやまなかった。

だが、彼が跪いているかの人のために建てられたという碑と、あの、彼女の飾らない率直な人柄のことを考えるとやはりここがふさわしいのかもしれない。今はもういない、彼女を偲ぶには。

彼女が彼のそばから消えて三月ほど経った。彼女はソナチネにとっても友達ー畏れ多いことだが彼女のたっての願いでそう呼ぶーであったので偲ぶ思い出はたくさんある。その思い出を分かち合うことが自分にできること、と思い定めこの極秘の護衛任務の最初の一日目を臨んだものだ。

なのに――

今日も聴きたくない声が、言葉の羅列が聞こえる。できれば耳をふさぎたいが、建前上、ソナチネは彼の護衛なのでそんなことはできない。

「覚えているだろう？コトネの声を。聴いているだけで心が震えるあの声…妖精のささやき声とはあのようなものをいうのだろうな。

コトネが何かねだったら全てきいてやらなきゃといやむしろ叶うべきだと思ったよ。おねだりなんて滅多になかったが」

「どうして彼女の手を放していられたんだろう。一瞬でも放さずに四六時中手を繋いでいたら今も彼女はここにいたかもしれないのに…。手といえば彼女の手は美しかった。コトネは楽器を演奏するため手を大事にしていたと言っていたな。あの白くほっそりとした手を与えられた私は世界一の幸福も手に入れていたんだ…」

「コトネのあの艶やかな魅惑の黒髪をナデナデすると私の心のどこかが温かくなるんだ。あの感覚、それまではそんなものがあることすら知らなかった…。コトネは私の知らない扉を開けてくれたんだ。忘れられない…」

こういった思い出話？妄想？（もしくは呪い）を護衛という役目で傍を離れることを許されず、ただひたすら垂れ流されるソレを強制的に延々と聞かされるようになって二月半が経った。国王陛下は政務で忙しいので相手をするのは夕暮れ前の一時間ほどだが、それは日課のように毎日のこととなっている。ただの思い出話としてきくにはあまりにも…甘いというか、重いというか、気色悪いというか。彼女本人がきけばもしかしたら気持ちが盛り上がるのかもしれないが第三者の立場で聞かされるのは非常に居心地が悪くむず痒い。聞き流せればいいのだが、時々返事を求めてきやがるのだコレは。

これまでソナチネが抱いていた彼への敬愛や畏怖、憧憬は最初の半月が経過したころには雲散霧消した。同じ言葉を繰り返しているだけなら（それはそれで精神の異常を疑ったかもしれないが）耐えられたかもしれない。だが彼が彼女思う言葉は尽きることがないらしく毎日違うセリフがその麗しい口から飛び出してくるのだ。今では、

消えてなくなった敬愛ではなく役目への義務感のみがソナチネをこの場に踏み止まらせている。

ナデナデのくだりで全身を虫が這うような感覚に襲われたソナチネはそのまま扉の向こうに行ってしまえばいいのに戻って来なければいいのに、と本気で祈った。

黒い気持ちに覆われた一瞬ののち、それまでの忠誠心をなんとか思い出し、恥じた。

忠誠心の方を。

ソナチネはペザンテ王国の第一王国騎士団に、いまは五名所属している女性騎士の一人である。当時の王太子の、現在の国王陛下の幼友達として選ばれるくらいなので彼女自身も生まれは由緒正しい貴族だ。ついでに二歳上の姉は目の前のへたｒ－違った国王陛下－の元婚約者だ。

そんな立場のソナチネが騎士となるまでにはいろいろと紆余曲折があったのだが、彼女がこの道を志したその理由は、敬愛する（今は残念なことになっている）国王陛下に剣をもって仕えたいと願ったためだ。そのはずだった。

「――というのはどうだろうか？」

いつしか己の分を忘れ、この背中を蹴り倒してしまいたい、という内なる切望と戦っていたので、その背中から久しぶりに自分へと言葉がかけられたことに、ソナチネは一瞬気がつかなかった。

護衛についているのはソナチネ一人ではないが、ほかの人員は彼が人払いをしているので、少し離れたこちらからは目に付かないところにいる。だから今の言葉もソナチネ一人しか聞ける範囲おらず、当のソナチネも聞いていなかった。無礼を承知で聞き返すほかない。

「恐れながら、陛下。もう一度おっしゃっていただけますか？」

いつのまにやら彼は、膝をついたまま振り返ってこちらを見ていた。

「すぐには承服できないのはわかる。だがこれしかないのだ――嘘でも冗談でもなく私の心の底からの願いだ。私は真剣だ、頼む、受けてくれ。」

ソナチネが話をきいていなかったため聞き返したことがわかっていないのか、アレグロは自分の命令？申し出？が受け入れられなかったと勘違いし、きちんとこちらに向き直り真剣な顔で懇願している。今にも手をつかんばかりに。

いくら主君の願いでも、真剣に頼まれても、聞いてもいないことを「わかりました」と言えるほどソナチネは盲目的ではない。今は特に。だから彼の態度にあわて、自分も彼の前に膝を着き、もう一度ききかえした。

「失礼ながらきいておりませんでした。陛下。申し訳ございません」

そう言うと、ソナチネが熱心に自分の話に聞き入っているものだとでも（オメデタクも）信じていたのか彼はかすかにムッとした顔をしたが、きいていなかったものは仕方がないと思い直し、先ほどの己の言葉を繰り返した。

「真剣な話だ。そなたに、私のあとを継いで国王になってほしい。」

「は？」

聞き返すべきではなかったのか、いやそもそも本来なら近衛兵の仕事である国王の護衛など断っていれば・・・

国王が発狂したのか、それとも「真剣だ」と言いながら冗談を言うようになってしまったのか・・・

さまざまな思いがソナチネの胸に浮かんだ。

この時間をなかったことにはできないのだろうか。

国王の乱心（後書き）

書くのは楽しいものですが、素人の拙い文でお目汚しになったら申し訳ございません。
読んで下さったことに心から感謝いたします。

そもそものはなし（前書き）

異世界トリップのストーリーをものすごく雑にまとめてます。ごめんなさい。

そもそものはなし

2．そもそものはなし

三年前のことだが、コトネこと成沢琴音は突然このペザンテ王国に現れた。（琴音の世界では「いせかいとりっぷ」というそうだ。）琴音は国王アレグロの私室（もっと詳しく言うと寝室のベッドの中、無論彼が寝ているときに）に現れた。不審者として尋問されたが、当時の王国を歴史上最大の危機にさらしていた魔族の侵入を憂いた神官長による「神子の召喚」の儀式で呼び出された神子であることがすぐに判明した。

神官長や国の重鎮たちはこぞって彼女に魔族の掃討を依頼した。まだ１６歳だったという彼女は当然というか全てを断り続け、むしろ元の世界に返してほしいと懇願した。その身勝手な依頼に怒りもした。だが、神子の召喚の依頼条件である魔族の掃討を成し遂げなければ帰れないこと、彼女一人を行かせるわけではないことを懇切丁寧に国王アレグロが説明すると、しぶしぶ折れた。

その後一年ほどで見事に自分の（ムリヤリ押し付けられた）仕事を成し遂げた琴音だったが、本人が期待していたとおりすぐには元の世界へ帰れなかった。無事王都に帰還した後も、凱旋パレードを終えて神官長の祝福を受けた後も。「国境を越えてやってくる魔族の侵入をなくすこと」が召喚の条件であったので、彼女の力を借りて国王が魔族との間に「国境の設定と不可侵条約の締結」が成立させた時点で彼女は速やかに元の世界に戻れるはずだった。神子の召喚は王国の歴史の中でも珍しいことだが前例がないわけではないのでこれは異常なことであることがわかった。

当然琴音は怒り狂った。発端である神官長に詰め寄ると、神官長はその地位を降りた。怒りの矛先に（無責任にも）あっさり辞められてしまうと、それ以上追求する気が失せてしまったのか、全てどうでもよくなってしまったのか、元の世界に帰る方法を探すこともやめ、彼女はふいに滞在していた王宮の部屋から姿を消してしまった。国王アレグロはあせり、国中に彼女の捜索を命じた。この頃には心の底から彼女に惹かれていたのだ。

＊　＊　＊

このあたりで、そもそも事の起こりの語りが終わっていればソナチネにとってはまだ救いがあるのだが、残念なことにまだ続きがある。

＊　＊　＊

姿を消して約三ヶ月後、琴音はアレグロの捜索網とは無関係に発見された。彼女が仕事を得た王都にある小さな大衆食堂へ宮廷に仕える文官が偶然立ち寄ることで見つかってしまったのだ。王都は彼女がいる可能性が一番高かったので１０００人体制でもって探していたのだが、みな黒髪黒眼を目印にしており、金髪カツラをかぶるという単純かつ手軽な変装でおもしろいようにダマされたらしい。

そこからのアレグロの努力は涙ぐましかった。国王自ら琴音の元に赴き、王宮へ帰るように説得を始めた。毎日。いわく「彼女が家へ帰ることができなくなった原因は王国に、ひいては国王自身の不甲斐なさにあるのだから、彼女の生活の保障と帰還するための方法を探るという責任を果たさせてほしい」とのことという内容で。

（彼女を発見した文官は「詭弁だ…連れて帰りたいだけだろ」とつ

ぶやいた）

半年ほど説得し続けると、意志の固い琴音も（このころその片鱗を見せ始めていたアレグロの偏執狂さに根負けして）ようやく折れた。（「ストーカーにほだされたみたいで嫌だなあ…」と彼女がぼやいていたといないとか）

（余談だがソナチネの姉でアレグロの婚約者であったソプラノは、このことを知るとさっさと婚約解消を申し出た。「これでやっと愛しの彼のところへ飛び込めるわ」と。）

フリーになったしこれで堂々と口説ける、と思ったのかアレグロはそれまでの遠慮（していたのか？）をかなぐり捨て、積極的に行動を開始した。もともと男前で誠実な態度をとってきた彼への琴音の中でのポイントは（不思議なほど）高かった。王宮の一室を与えられ、学生だったのだからと教師をつけられ、こちらの世界の歴史やその他礼儀作法・教養を身につけ始めた彼女を相手に、最初に直球で告白して即効フラれると、次には俺様態度で迫ってみたり、あるいは伝説の木の下に呼び出し告白してみたり（彼女曰く「どこのギャルゲー…ていうか古い」）、また、ちょっと冷たくした直後に頬を赤く染めつつ「べっ別に好きじゃないんだからなっ！」と強がってみせたり（彼女曰く「今度はツンデレ？引き出し多いわねー」）。

さらに半年ほど経った頃、もともと悪くは思っていなかった上に、迫られること自体がおもしろくなってきたのか琴音はついにアレグロの正式なプロポーズを受けた。彼は何をどう勘違いしたのか、「紐で繋いだコウモリを連れ、首にはニンニクを連ねた首飾り、黒いマントをはおり、両手には十字架と聖水、そして相手の首筋に口付ける」を彼女の世界の求婚の作法と信じ、実行した。退治する側だかされる側だか、判然としない彼の奇行がプロポーズだと知ると、

彼女は爆笑し涙を流しながら頷いた。

「もしかしたら私は明日にでも、突然もとの世界に帰ってしまうのかもしれないのよ？私の召喚条件は満たされているんだもの。あなたはそれでもいいの？」

「だったらなおさら、一分一秒でも長く一緒にいたいんだ。約束するよ、君がどこに行ってしまっても、私の妻は君一人だ。」

――　そう、たとえ琴音が式の前夜、元の世界へ突然帰ってしまったとしても　――

そもそものはなし（後書き）

読んで下さる奇特な方がいたことに感謝します。

姉の見解

3．姉の見解

「ノノちゃーん、陛下のバカがまたひどくなったよー　」

前置きもなくいきなり泣きついてきた妹の姿に姉・ソプラノは「こりゃ相当追い詰めらてるな…」とため息をついた。呼び名も口調も幼いころのものに退化してしまっている。自分よりも随分と背の高い妹は、そう簡単に泣くようなヤワな娘ではないのに。

ブリッランテ宮の庭で起こった国王の突然の乱心に呆然としていたソナチネは、彼が他の護衛とともに宮殿の建物内へと戻っていった後もしばらくその場を動けなかった。ハッとしたのはいつの間にか日暮れの時間となった庭園のどこかでカラスが「カァ」と鳴いたためだ。ソナチネの現在の勤務は日中の国王の護衛なので、このあと近衛の詰め所で今日の報告書を書いたら仕事は終わる。先ほどきちんと引継ぎできなかったことは気になるが、国王本人が何も言わなかったので大丈夫だろう。

勤務が終わったあと、騎士団の宿舎に帰らなかったソナチネは、姉の嫁ぎ先であるエネルジコ家の屋敷を訪ねたのだ。

似ているようで似ていない姉妹である。二人とも燦然と輝くクセのない銀髪に大きな蒼い瞳、よく似た美しい顔立ちをしているが与える印象がまるで違う。

ソナチネは髪を耳の辺りで切りそろえており、筋肉のついたすらり

とした長身はどこから見ても強く凛々しい女騎士だ。顔つきにも鋭いものがある。
対して、ソプラノは長い銀髪を華奢な背中にサラリと流した、美しい儚げな深窓の姫君だ。妹と違い、華やかで柔らかい線の美貌を持つ。
二人はコン・フォーコ公爵家の姫君なのでソプラノの方が正しい姿だろう。性格の全く違う姉妹だが、昔から仲は良かった。

「で、何があったの？説明してくれたいとわからないし、だいいちあなた不敬罪よ。たとえ事実でも口にしてはいけないわ。なるべくなら」

泣くばかりで要領を得ない妹を落ち着かせ、ようやく話を始めた。

「なるほど…ふうん、そうきたか」

何があったのか事の経緯を聞きだしたソプラノは訳知り顔でうんうん頷いた。妹が意味不明な国王陛下の趣味？呪詛？に付き合わされていることは以前から独自の情報網で掴んでいた。ただ、なにぶん意味不明なのと、現在ソプラノは王宮での地位も役職も特に必要としておらず、夫であるレント・エネルジコ第一騎士団長に知らせても「特に問題ない」というばかりなので、この極秘情報は使い道もなく持て余していたのだ。

「どうしましょう！？　どうやったら陛下は元にお戻りになるでしょうか…」

一方、頼りにしている姉にこれまで極秘で誰にも相談できなかった内容をぶちまけてしまえたソナチネは、若干罪の意識を感じながらもホッとしていた。どの道こんな重要な話をソナチネが姉に黙って

いられるわけもないことはアレグロも知っている。

この姉妹、体力はあってもほんの少し頭の回転の鈍い妹ではなく、未来の王妃として厳しく躾けられ賢くしたたかに成長し、亡父が命じていた国王との婚約を権謀術数の限りをつくして見事に解消してみせた姉の方が、（今も昔も）主導権を握っている。

その美しく細い指先を、あごにあてて姉はのたまう。

「そうねえ…私が今言えることは、諦めなさいってことかしら？」

「はっ？へっ？」

本日二回目の予想外に再び言葉がでないソナチネ。

「女王は王国の歴史上でも初めてじゃないわ。悪くないと思うわよ？」

「正直、陛下が本格的に発狂する前に王位を継承しておいた方が無難よ。あなたの王位継承権の順位は決して高くはないんだから」

「あちらからの申し出なんだし、三ヶ月もあったんだから準備は整ったってことだわ。最終的な用意ができたからこそあなたに話したんでしょう。おそらく」

「っちょ、姉上。何で」

ほんの少し頭の回転の鈍い妹は話しについていけていない。

それでも容赦なく、真実に近い推測を姉は話す。

「つまりね、ソナチネ」

姉は妹の、自分と同じ蒼く澄んだ瞳を見据えた。

「陛下はコトネを追って、彼女の世界へ行くつもりなのよ」

「コトネが帰還した後、魔術師長が連日王宮で何かを研究していたそうよ。陛下に命じられてね。たぶんコトネの世界に渡る方法を探っていたんでしょう。まったく…それができるなら最初からコトネを帰すためにやればいいのに。誠実そうな顔してホント最低。よっぽど返したくなかったんだわ。（ま、私もコトネに黙ってたけど。逃げられちゃ困るわ私が。）」

「行ったら帰っては来れないのよ。たぶん人一人を送り込む方法しかないんだわ。帰りがあるならコトネをさらってすぐに二人で帰ってくればいいんだもの」

「ようするにあのバk、いや陛下、あ、やっぱりバカでいいか。バカは国を捨てる気なんでしょ。で、代わりの王、と」

「は――――っ！！それがなんで私っ！！」

うん、姉にもキミの気持ちは痛いほどわかる。

だからそのバカ力で肩を握り締めないでほしい。お姉ちゃん妊婦なのよ。

姉の見解（後書き）

読んで下さる方が一人でもいたらいいなあ、と投稿しています。
ありがとうございました。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n5445z/

消えた王妃と白銀の騎士

2011年12月18日11時56分発行